

昔むかし、あるところに、お金持ちの男の人がいました。なかなか子どもがさずかりませんでしたが、やっと女の子が生まれました。そこで、その子にフライラと名前を付けて、たいせつに育てました。

ある日、お母さんが、フライラをおんぶして歩いてみると、ひょうたんがふたつなっていました。大きいひょうたんと、小さいひょうたんでした。フライラは、お母さんに、「あの小さいひょうたんを取ってちょうだい」といいました。お母さんは、

「あんな小さいひょうたんをどうするつもり。大きいのを取ってあげましょう」といいました。フライラは、小さいのがほしいと泣き出しました。

「泣いたって、取ってあげませんよ」と、お母さんはいって、そのまま家に帰りました。

家に着いても、まだフライラは泣いていました。お父さんが、

「フライラはどうして泣いているんだね」とききました。お母さんは、フライラがまだ小さいひょうたんを取ってほしいといたことを、話しました。

「いいじゃないか。その小さいひょうたんを取っておやり」と、お父さんがいったので、お母さんはもどって行って、小さいひょうたんを取って来てやりました。

それからというもの、小さいひょうたんは、いつもフライラの後に付いて来て、「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、フライラに、

「ひょうたんを、やぎたちの所に連れて行っておやり」といいました。フライラが、ひょうたんをやぎたちの所に連れて行くと、ひょうたんは、やぎを一頭ぺろりと飲みこんでしまいました。そして、つぎからつぎへとやぎを飲みこみ、とうとう、お父さんが飼っていた三百五十頭のやぎを、ぜんぶ食べてしまいました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、フライラに、

「ひょうたんを、ひつじたちの所に連れて行っておやり」といいました。ひつじの所に連れて行くと、ひょうたんは、ひつじを一頭ぺろりと飲みこんでしまいました。そして、つぎからつぎへとひつじを飲み込み、とうとう、お父さんが飼っていた七百頭のひつじを、ぜんぶ食べてしまいました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、フライラに、

「ひょうたんを、牛の所に連れて行っておやり」といいました。ひょうたんは、牛を一頭ぺろりと食べてしまうと、つぎからつぎへと牛を飲みこみ、とうとう、お父さんが飼っていた牛を、ぜんぶ食べてしまいました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、こんどは、

「ひょうたんを、らくだの所に連れて行っておやり」といいました。ひょうたんは、らくだを一頭べろりと食べてしまうと、つぎからつぎへとらくだを飲みこみ、お父さんが飼っていたらくだを、ぜんぶ食べてしまいました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

お父さんは、

「ひょうたんを、牧場に連れて行っておやり」といいました。ひょうたんは、牧場で働いていた人たちを、つぎからつぎへとみんな飲みこんでしまいました。そして、フライラの後に付いて来て、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といいました。

こうして、ひょうたんは、馬も、にわとりも、ホロホロ鳥も、かもも、はとも、みんな食べてしまいました。残ったのは、フライラとお父さんだけでした。お父さんは、

「わたしの他には、もう何もない。わたしでよければ食べてくれ」といいました。ひょうたんは、お父さんをぐいっとつかまえると、ぱくりと飲みこんでしまいました。そして、

「お肉が食べたい、フライラ。お肉が食べたい」といって、フライラを追いかけて来ました。

フライラは、たった一頭残っていた、雄ひつじの所に、逃げて行きました。その雄ひつじは、お父さんがとても大切にしていた雄ひつじでした。

ひょうたんは、フライラに追い付くと、ぐいっとつかまえようと思いました。そのとき、雄ひつじが、ひょうたんに飛びかかって行って、つのでひとつきしました。そのとたん、ひょうたんは、ぼんとはじけて、中から、お父さんが飛び出してきました。

その後から、はとが飛び出しました。かもも、ホロホロ鳥も飛び出しました。にわとりも、馬も、牧場で働いていた人たちも、らくだも、牛も、羊も、やぎも、みんなみんな飛び出して来ましたとき。

これでおしまい。ねずみの頭を捨てちゃいな。